

# 甦る儀式殺人告発

——1928 年、マシーナでの事件——

佐藤 唯行

## 1 アメリカを信頼していたユダヤ移民

1928 年の 9 月中旬のある日、ニューヨーク州の田舎町、マシーナで商店を営む東欧系ユダヤ移民、ジェイコブ、シュルキンは、一日の商売をおえ、いつもの様に自宅でくつろいでいた。この夜、彼は珍しく古いアルバムをめくりながら、四七年間の人生の来し方に想いをめぐらしていたのである。

顧みれば、生まれ故郷の白ロシアを去り、5000 マイルの長旅の果てにアメリカへ移り住んだ 1902 年には、彼は二一歳の若者であった。

その後の彼の人生は文字通り働きづくめの毎日であった。ある時は、ニューヨーク市内のロワー・イーストサイド地区の裏街を徘徊する行商人として、またある時は家具工場の職工として懸命に働き続けてきた。そして 1913 年、ささやかな開業資金をたずさえて、移り住んだこの町でむかえた開店前夜の胸の高鳴りを、彼はつい昨日の事の様に覚えていた。

彼のこうした半生は、ユダヤ人同士のビジネス競争が激化したロワー・イーストサイド地区を見かぎり、商人層が不足している地方都市へ、あらたなビジネス・チャンスを求めて移り住んだ当時の多くの東欧系ユダヤ移民の典型といえるものであった。

マシーナの目抜き通りに構えた彼の店は家具、電化製品を扱い、よく繁成した。小さかった店は、1928 年迄に、間口 18 メートルの店舗へと拡張をとげていた。新しい七人乗りの大型乗用車、そして妻子に毎冬買い与えられた新品のカシミアコートはシュルキンの家の豊かさの象徴であった。彼はささやかな夢を実現した今の暮しぶりに満足し、この様な暮しを自分に与えてくれたアメリカという国に感謝の念さえ抱いていた。

彼は自分たちにむけられた近隣社会の敵意を薄々感づいてはいた。しかし、その大きさについては、いささか見誤っていたようだ。

その敵意とは、この町に來住してから、いまだ日浅くして、にわか小成金となった自分達、ユダヤ移民に対するキリスト教徒住民達の嫉妬心であった。

彼はニューヨーク市から取り寄せたイディッシュ語新聞を毎晩読むことを日課としていた。この新聞を通じて、彼はユダヤ人をとりまく内外の情勢、とりわけ当時の東南欧で現実には頻発した身の毛もよだつ儀式殺人告発、そして、その結果として生じるボグロム（ユダヤ人虐殺）の醜悪さを知ることができた。儀式殺人告発とは、ユダヤ人がキリストの受難を冒瀆する儀式を行なうために、キリスト教徒の幼子を誘拐して殺害するという、いわれなき虚偽の告発であった。彼は自分があとにした東欧にくらべれば、アメリカの状況は、まだまだ良いものだと思自分を納得させることができた。

というのも、この偉大な文明の先進国において儀式殺人告発が発生したことを彼は知らなかったし、また将来においても、おこりえないものと楽観していたからである。当時の数多くの東欧系ユダヤ移民と同様に、彼もまたアメリカという国に多大な信頼を寄せていたのだ。しかし、その彼自身が、まもなく儀式殺人告発の渦中へ巻き込まれることになるうとは、神ならぬ身のシュルキンにとり、いまだ知る由もなかった。

## 2 多人種・多民族社会アメリカの縮図

マシーナはニューヨーク州の中でもカナダ国境に隣接する北遠の地、セントローレンス郡に所在していた。一九世紀の半ば、酪農業の地方的中心として栄えたマシーナでは古い出自を誇るニューイングランド地方出身者の子孫達（ワスプ系）が人口の大半を占めていた。ところが、産業化が急速に進んだ二〇世紀初め以後、この小さな町のエスニック構成にも劇的な変化が生じ始めていた。それは、セントローレンス水系の豊富な水を用いた水力発電によるアルミニウム精錬業を営むアルコ社が、1903年に、この地に工場を設立したからである。以来、マシーナは同社の企業城下町として発展してゆくことになる。

アルコ社は必要とする全ての労働力を現地調達によりまかなうことができなかった。何故ならば、農民的出自を色濃く宿すワスプ系の旧住民の中には、長時間にわたり、耐え難い熱気にさらされる、電解槽での労働を嫌う者が多かったからである。そこで、労働力不足は低賃金、重労働に耐えうる東南欧系移民を招き寄せることによって主に解消されていった。

アルコ社の求人係りは、ニューヨーク港の船着場まで赴き、アメリカに到着したばかりの移民をマシーナへ連れてきたのだ。その結果、この小さな町は、五〇ヶ国以上の出身国を異にする多様な移民集団を抱え込む、文字通り「アメリカの縮図」となっていったのだ。<sup>1)</sup>

この町へ誘致された移民労働者は民族集団毎にエスニック・コミュニティを形成していった。百人を超えるイタリア系移民、それを上まわる数のポーランド系移民、そして、かなりの数のフランス系カナダ人が、1928年のマシーナでコミュニティを築いていた。

この他に、「商業の伝統」を携えた移民たちも、この町へ移り住んできた。そうしたひとつギリシア正教徒系移民は、町の中心部に数家族がレストラン、カフェを開店し始めていた。一方、ユダヤ移民が最初に定住したのは1898年に遡る。この年、この町とセントローレンス川とを結ぶ運河の開削事業が始まったのだ。その後、アルコ社工場設立にともなう労働人口の急増、ビジネス・チャンスの増大と共に、ユダヤ移民の数も増え、1928年迄に十九家族、約百人を数える程になっていた。彼等はこの町で新参者であった。しかし、商才にたけた彼等は既成服、呉服、家具、宝石等の小売業で次第に成功していった。何故ならば、古くから地元で商売を営んできたワスプ系商人達は、工場労働者として来住してきた外国出身の移民達の需要に、どの様に応えていったらよいか、良く判らなかつたからだ。これに対して、移民としての共通体験を持つユダヤ商人は移民労働者が何を望み、必要としているかを理解し、彼等が望む商品を迅速やかに仕入れ、供給することが出来たからである。<sup>2)</sup>

結果的に、彼等の店舗は、この町のメイン・ストリートで最も繁成する店となつていった。1919年には、町の中心部に自前の<sup>シナゴグ</sup>会堂を持つ程までに成長したユダヤ人社会は、マシーナでも相対的に裕福な集団を形成していった。冒頭に登場したシュルキンは、この会堂の理事長（俗人の長）を務めていた。

この様な状況の中で、僻遠の田舎町、マシーナでも、エスニック集団間の緊張、新移民系のにわか成金に対する旧住民の嫉視、更に外国人排斥を唱えるクー・クラックス・クランの威嚇行為が、目に見えぬ水面下で増殖していった。

1) S. J. Jacobs, "The Blood libel Case at Massena: a Reminiscence and Review," *Judaism* Vol. 28 (1979), p. 460.

2) S. J. Jacobs, "Blood libel in Smalltown, USA," *Jewish Chronicle*, sept 19. 1980, p. 25.

この意味で、人口 8500 人にすぎぬマシーナは、1928 年当時のアメリカの自画像を映し出すひとつの小さな鏡であったといえよう。

### 3 否定的ユダヤ人イメージの形成を促した儀式屠殺

マシーナにおいて、ユダヤ人に対する否定的イメージの形成を助長した背景のひとつに、この町のユダヤ教徒の霊的指導者、ラビであるベレル・ブレングラス（1876—1966）が定め、導入した厳格な宗教的戒律遵守の方針があった。

当時のマシーナ・ユダヤ人社会は、シラキューズ、ユティカ以北のニューヨーク州内では、宗教的に最も厳格なユダヤ人社会であったと言われる。その訳は、マシーナで、ユダヤ教礼拝を主管したブレングラスが、ユダヤ教諸派の中で、最も戒律の厳しい厳格正統派（ハシディズム）のラビであり、ユダヤ教律法に対する如何なる違反も許さなかったからである。彼が主管するこの町で唯一のユダヤ教会衆組織、「イスラエルの家」においては、祈禱、礼拝を行なう際、男性信徒にヤームルカ（小さなふちなし帽子）とタリット（礼拝用肩掛け）の着用を固く義務づけていた。<sup>3)</sup>

安息日の掟に従い、町の中心部に所在する会堂へ徒歩でむかう信徒達の外見は、キリスト教徒住民のそれとは似ても似つかぬ異形の姿であり、あたかもグリム童話の中から飛び出してきた不吉な魔法使いの様であった。

厳格に遵守された戒律の中でも、とりわけ否定的イメージの形成要因として重要であったのは、家禽、家畜の儀式屠殺であった。古来、正統派ユダヤ教の戒律によれば、食用の肉はショヘットという特別な屠殺免許を持つ人間が、律法に定められた畜殺方法で、処理したものでなければ、口にすることができなかった。そのため、この町のユダヤ教徒は、その殆どが、自分の家で、食用のにわとりを飼育していた。そして必要に応じて、ショヘットを兼務したブレングラスのもとに、それを持参し（時には牛さえも）、儀式屠殺を施してもらっていた。その光景は、しばしば近隣のキリスト教徒住民に目撃された。

儀式屠殺とは、その意味を理解しえない者（キリスト教徒）にとり、常に理屈拔きの拒否反応をひきおこす性格のものであった。キリスト教徒の目には、ブレングラスが施行した儀式屠殺は受け入れ難い「蛮行」として映じたはずで

---

3) S. S. Friedman, *The Incident at Massena: Anti-Semitic Hysteria in a Typical American Town* (N. Y., 1978), p. 110.

ある。<sup>4)</sup>

儀式屠殺に対するキリスト教徒住民側の拒否反応は、当時、他の幾つかの地域では、顕在化することさえあった。一例をあげれば、1928年のコネチカット州内ではユダヤ教の儀式屠殺を非合法化しようとする住民運動さえ発生している。<sup>5)</sup>

儀式屠殺を自宅の裏庭で繰り返すブレングラスの姿を常日頃、垣間見てきた近隣のキリスト教徒住民にとり、彼とその仲間が幼子を連れ去り、その喉を無慈悲にもかき切ったかもしれないと空想をめぐらしてゆくことは、それほど困難なことではなかった。何故なら、中世ヨーロッパ以来、キリスト教世界においては、ユダヤ人は超自然的かつ、悪魔的能力を遺伝的に備えた神秘的存在であると、長らく信じられてきたからであった。そして、このようなユダヤ人観は、二〇世紀前半のアメリカ国内においても、一部のキリスト教徒民衆の意識の深層にしっかりと植えつけられていたからである。

その様な証拠として、著名なユダヤ人の歴史学者、ジョシュア・トラクテンバークの個人的体験を示すことができる。それは、彼が両大戦間期にカンザス州を旅してまわった時のことであった。彼はそこである農民と知り合った。その農民は、彼のまわりをぐるりとまわって彼の身体を眺め続けた。農民は彼の頭に角がはえていないという理由で、彼がユダヤ人であるということをどうしても信じようとしなかったのだ。<sup>6)</sup>このエピソードから判るように当時のアメリカには、ユダヤ人が悪魔の手先である証しとして、その頭には角がはえているという迷信を大まじめに信じる人間が、実際に存在していたのだ。

#### 4 流言に踊らされた人々

1928年9月22日、マシーナの空は秋晴れに澄み渡り、人々は普段と変らぬのどかな土曜のひとつときを楽しんでいた。この日の午後、アルコ社で働くワスプ系の労働者、デーブ・グリフィスの四歳になる娘、バーバラが、兄と森の中で遊んでいる内に行方不明となってしまった。夕暮れ時になっても彼女は家へ戻らなかった。狼狽した父母は近隣の人々と共に、付近の森をくまなく捜しま

4) *Ibid.*, pp. 112, 115.

5) *Ibid.*, p. 53.

6) J. Trachtenberg, *Devil and the Jews* (N.Y., 1943), p. 227.

わった。

僻遠の田舎町で発生したこのローカルな幼女行方不明事件は、その後、僅か一日たらずの内に、アメリカ・ユダヤ人社会全体の安寧を揺がす反ユダヤ主義的事件へと変貌を遂げてゆくことになる。この日の夕刻から夜半にかけて、幾つかの醜惡な流言が燎原の野火の如く、町中を駆けめぐった。<sup>7)</sup>

その内容は、およそ次の様なものであった。「明日の日没から、何か、とても重要なユダヤ教の聖日が始まるそうだ。」「その日はヨム・キプルと言うそうだ。」「そこでは儀式のためにキリスト教徒の血が用いられるそうだ。」「このヨム・キプルとバーバラの雲隠れとの間には、何か関係があるのではないか」<sup>8)</sup>

ヨム・キプルとは一体何か、それはユダヤ教徒にとり極めて神聖な日であった。篤信のユダヤ教徒は、この日、過去一年間に犯した罪のゆるしを求めて終日断食して、ひたすら祈り続けるのであった。ユダヤ教の暦法上、この年のヨム・キプルは幼女失踪の翌日、9月23日の日没から始まることになっていた。

さて、失踪したバーバラを搜索する活動は多数の地域住民を動員した、大がかりなものとなっていった。そして搜索活動の中核を担ったのは、その数二五～三〇人の地元の消防団員であった。

彼等の中には、かなりの数のクー・クラックス・クランの団員が含まれていた。消防団、自警団のメンバーとクランのメンバーが人格的に重複することは、当時のアメリカ農村部においては、よくみられた現象であった。

彼等の中には9月22日の夜に、ユダヤ人商店に対する屋捜しを始める者さえ現われた。

この町に住む三人のユダヤ人が共同経営する洋服店、ストーン商会が店じまいをしている際中、消防団員、ロイ・カントリーマン率る数人の消防団員がやってきた。(ロイ自身がクランのメンバーであった証拠はないが、彼の父は地元クランの指導者であった。)

彼等は店にいわせた共同経営者の一人、ソール・ローゼンバウムにむかって「彼女(バーバラ)は、おたくの地下室へ降りていったかもしれないんだよ。みせてもらおうよ」と言いながら、階下へ降りていった。「子供なんてみなかつ

7) S. Feldstein, *The Land that I show You: Three Centuries of Jewish Life in America* (N.Y., 1978), p. 299.

8) S. J. Jacobs, "Smalltown," p. 25.

たさ」と答えたローゼンバウムは不快の表情を隠すことができなかった。

ローゼンバウムは、この屋捜しは不当なものだと内心、憤慨した。しかし、彼は、この場はことを荒だてない方が得策だと判断したのだ。結局、消防団員達が地下室で目にしたものは箱詰めにした紳士物衣料品の在庫のやまだけであった。この時、他の主だったユダヤ人の商店主は、既に店の戸口に施錠をすませ、帰宅した後であった。そのため屋捜しを受けることはなかった。しかし、消防団員達は、あるじが帰ったユダヤ人商店の窓にむけて、手当たり次第に懐中電灯の閃光を放ち続けていた。<sup>9)</sup>

深夜、疲れきった捜索隊が、四方から戻ってきた時には、町の中心部に立ちつくす人々の間では、「ユダヤ人がバーバラを連れ去った」という流言が、既に知れ渡っていた。はりつめた恐怖心がユダヤ人住民を襲った。一〇年前、東欧のガリシアから、この町へ移住してきたユダヤ人の某少女は母親に、こう尋ねた。「お母さん、私達、ポグロムに襲われるの」

「もし、バーバラが無残な姿で発見されたならば、……地域住民の怒りは自分達にむけられるのでは……」その様な想像をめぐらしながら、この町のユダヤ人達は、誰れもが眠れぬ一夜を過さねばならなかった。<sup>10)</sup>

## 5 流言をながしたのは誰れか

「幼女の失踪」と「ユダヤ人による儀式殺人」とを結びつける醜惡なデマを流した最初の人物は一体誰れであったのか、我々は次に流言の出所を突き止めねばならない。

結論から言って、ワスプ系のネイティブ・アメリカ人が、上述の連想をめぐらすことは容易ではなかったはずである。何故ならば、彼等とその父祖が生育したアメリカ、そして数代前の祖先が生育した北西欧においては、儀式殺人の記憶は人々の意識の中で、既に風化していたからである。

これに対して、上述の連想を瞬時に導き出せる思考回路の持ち主とは、中世的な迷蒙を色濃く宿したヨーロッパの後進地域、東南欧出身のキリスト教徒移民であったはずである。

彼等の出身地、一九世紀末から二〇世紀初頭の東南欧では、現実に、「儀式

9) S. S. Friedman, *op. cit.*, pp. 79f.

10) *Ibid.*, p. 106.

殺人」の咎でユダヤ人を告発する事件が頻発していたからである。当時、マシーナの町でコミュニティーを築きつつあった数多くの東南欧系キリスト教徒移民集団の中でも、その本国から、恐らく最も強い反ユダヤ主義の種子を携えて来住した集団が、ギリシア出身のギリシア正教徒であったと思われる。

古来、ギリシアにおいては、ユダヤ人は憎むべきトルコ人によるギリシア支配の片棒をかつぐ「トルコ人の同盟者」として、あるいは「ギリシア人を搾取する商人」として、長年にわたり憎悪の対象とされてきた。この憎悪はとりわけ、マケドニアの都市サロニカで猛威をふるっていた。サロニカでは第一次世界大戦後、小アジアから帰還した多数の在外ギリシア正教徒系商人と、以前からサロニカの商業を支配していたユダヤ人との間で、商業覇権をめぐるあつれきがたかまり、それが反ユダヤ主義に拍車をかけていたからである。<sup>11)</sup>

この様なサロニカから渡来してきたギリシア正教徒系移民が、実はマシーナの町にも移り住んでいたのだ。彼の名はアルバート・コムナス、町の中心部で小さな飲食店を営んでいた。

ユダヤ人に対する彼の偏見は、この町のユダヤ人の間で、つとに悪評が高かった。かつて、コムナスの息子が幼くして病死した時、マシーナのユダヤ人達は天罰が下されたといって嘲笑した程であった。<sup>12)</sup>

当時、マシーナに在住したユダヤ人、イーライ・フリードマンの証言によれば、このコムナスこそ、バーバラ失踪の原因をユダヤ人の仕業に相違ないと口走った最初の人物であった。バーバラが失踪した9月22日の夕刻、コムナスは、自分の店に軽食をとりきた搜索任務中の警官マッキャンに対して、コーヒーを給仕しながら、「ユダヤ人共は、祭日を祝っている際中なんですよ。奴等は、おそらく血を必要としているんでしょう。」と耳打ちした。<sup>13)</sup>コムナスの店、クリスタルパレスは、ニューヨーク州警察に所属する巡査長、マッキャンとその部下ヒューズが投宿したホワイツ・ホテルのほんの目と鼻の先にあった。マッキャン等は、マシーナに滞在中、定期的にこの店で食事をとっていたのだ。その度に、コムナスの発言を通じて、マッキャンがユダヤ人に対する疑惑を植えつけられていったと推測することはあながち不自然ではなからう。

仮に今回の事件で、現場捜査の責任者マッキャンが、余所から来た州警察の

11) A. Ruppin, *Jews in the Modern World* (London, 1925), p. 205.

12) S. S. Friedman, *op. cit.*, p. 64.

13) *Ibid.*, p. 71.



一員ではなく、地元の人間関係に精通した地元警察の警官であれば、常日頃より反ユダヤ的言動に満ちたコムナスの言葉をまにうけるという誤ちを犯さなかったのかもしれない。しかし、バーバラがマシーナの行政区域を超えて失踪した可能性が高かったため、この事件の所轄は地元警察から州警察へ移されていたのだ。<sup>14)</sup>

## 6 警官に疑念を与えた非ユダヤ的ユダヤ人の返答

9月23日、夜明けと共にマシーナの山野を再び照らし始めた朝の陽光は、もうすでに南天高く昇りつめようとしていた。それにも拘らずバーバラの行方えは、いまだ沓として判らなかった。

何とかして局面を打開しなければならない。疲労とあせりが高まる中で、町長ハウズの脳裏には、昨夜、マッキャンから報告を受けた「ユダヤ人隠謀論」がよぎり始めていた。今回の失踪事件にユダヤ人が関与しているという流言には、ひょっとしたら何がしかの根拠があるのではないか。そう考え始めた町長はもう矢も楯もたまらなくなり、ラビ、ブレングラスの出頭要請を決定してしまった。

流言にもとずいて、この決定を町長が下してしまった背景のひとつには、この町に住む一人の「ユダヤ人」が示した「誤解を与えかねない言動」があったことを忘れてはならない。

この「言動」はマッキャンを通じて先刻、町長に報告されたばかりであった。

実は、この日の午前10時30分、マッキャンとヒューズは、この町に住む「ユダヤ人」、アルコ社の労働者でモリス・ゴールドパークという人物のもとを既に訪れていた。不可解なことではあるが、二人の警官はユダヤ教について、この町の如何なるユダヤ人よりも知識をもたない彼を尋問の対象として選んでしまったのだ。ゴールドパークはユダヤ人の子として、ニューヨーク市内のスラムで生まれた。しかし、その後、幾つかの事情からカトリック系孤児院で育てられ、以後、ユダヤ人社会の周辺に常に身を置いて暮してきた人物であった。いわば、ユダヤ人社会とは疎遠な、ユダヤ教離れのユダヤ人といえよう。

このゴールドパークに向かって、マッキャンは「ユダヤ人は母国において、

---

14) S. J. Jacobs, "Smalltown," p. 25.

聖なる礼拝の際に、人間の生き血を使用するというのは本当か」という質問を行なった。この質問に対して、ゴールドバークはユダヤ教に関する自分の無知を言いわけがましく述べた後、こう返答した。「ヨーロッパで、その様な習慣が存在するということは知りません。けれど、アメリカではそんな習慣はないでしょう。自分は、この問題について充分に知らないので、どうか、ラビに聞いて下さい。」<sup>15)</sup>

この返答は大変まずいものであった。何故なら、事によると儀式殺人というものには実在するのではないかという誤解を相手に与えかねない返答だったからである。彼は、この時、即座に、そして断固たる口調で、否と返答すべきであった。彼のあまりにも曖昧な返答は、昨夜以来、偏見の火種をくすぶらせていたマッキャンの心の中に、更に疑惑の油を注ぐ結果となった。更に言えば、ゴールドバークの曖昧な返答は、事態のその後の悪化を導く一因ともなったのだ。

## 7 官憲当局に尋問されたラビ

出頭要請を受けたブレングラスは、この日の午後、12時30分に、町役場の地下にある警察署へ赴いた。この時、興奮した群衆が署の周囲を取りまいていた。その数は300人から400人にも及んでいた。群衆は彼の姿を見つけるや、「ラビのブレングラスがいるぞ」と喚声をあげた。<sup>16)</sup>彼等は今後の事態の進展如何によっては、暴徒になりかねない雰囲気を持っており、そのことが、この町のユダヤ人住民に、いいしれぬ不安を与えていた。署内へ入ったブレングラスは町長と警官達の前に座らされた。そこで彼は、マッキャンから、「ユダヤ人が儀式殺人を行なうという事は真実か否か」を問われる質問を受けた。両者の会話のやりとりは当時のユダヤ系新聞の記述によれば、およそ次の様なものであった。

マッキャン 「あなたは子供が行方不明になっている事は御存じですね」

ブレングラス 「はい、存じております。」

マッキャン 「今日は(ユダヤ教の)大きな宗教的祝日ですね」

15) "Appology and Suspension Close Ritual Murder Incident," *American Jewish World* Oct 12, 1928, p.1.

16) *Ibid.*, p.1.

ブレングラス 「はい、そうです。」

マッキャン 「ヨーロッパでは、あなた方が、人間を生贄として神に捧げるとい  
う話について、あなたは何か情報をお持ちですか。」

ユダヤ教に対する無知と偏見が生み出したこの質問に驚愕したブレングラスは憤然たる口調でこう反論した。「世界で最も文明の進んだ合衆国の公職者ともあろう御方が、その様に馬鹿げた質問をあえてなさるとは驚きであり、心外です。……人間の血どころか、動物の血でさえ、儀式に捧げることはユダヤ教律法により固く禁止されているのです。」

ブレングラスの明晰な反論に対して、マッキャンも町長も、最早、これ以上、この件について尋問することはできなかった。面目を失なったマッキャンは、自分としては、この様な質問を行ないたくはなかったのだが、この町に住む、ある外国人（コムナスをさす）から、ユダヤ人が儀式殺人を行なうという「情報」を告げられたため、仕方なしに、今回の尋問に及んだと、いいわけがましくブレングラスに弁解した。<sup>17)</sup>

これに対して、ブレングラスは「これはユダヤ人全体に対する名誉棄損行為だ。」とマッキャンを非難した。そして「情報」提供者の名を明かすよう迫った。しかしマッキャンは唯、「外国人」と答える他に、この場を切りぬける術を持たなかった。

押し問答が続いた後、ブレングラスは憤然たる表情で署をあとにした。

## 8 難局に対処したユダヤ人社会の指導者

署内での尋問に際してブレングラスは町長と警官達を前にして、一切不正確な事を述べず、儀式殺人の存在をきっぱりと否定した。

彼は言わねばならぬ事を知っており、必要とあらば、憶することなく雄弁に語ることができた。彼は東欧、リトアニアの生まれであった。しかし、1915年10月に渡米する以前に、英国の南ウェールズ地方の港町、カーディフにおいて数々に及ぶ滞在生活を経験していた。<sup>18)</sup>彼は、かの地で、ウェールズ訛

17) Ibid., p.1.; ed. by., C.Reznikoff, *Louis Marshall: Champion of Liberty, Selected Papers Vol.1* (Philadelphia, 1957), p.419.

18) S.J.Jacobs, "Smalltown," p.25.

りではあるが、かなり流暢な英会話能力を既に修得していた。

この様に、英語運用能力と危機の本質を見誤らぬ洞察力とを兼備したブレングラスという人物が、マシーナに存在し、適切な指導力を発揮しえた事は、この町のユダヤ人にとり不幸中の幸いであったといえよう。

彼は9月23日に、地元のユダヤ教会堂で催された礼拝において、自分達を取りまく反ユダヤ主義に対して、憶することなく立ち向かうよう会衆達に語りかけた。この日、会堂へむかう道すがら、近隣住民達に野次をあびせられ、すっかり意気消沈してしまったこの町のユダヤ人達は、彼の説教によって、この難局を乗り越えるために必要な勇気を心に満され、再び家路につくことができた。<sup>19)</sup>

一方、同じ頃、この町のキリスト教徒住民達が所属する教会でも、日曜礼拝が行なわれていた。しかし、プロテスタントの牧師、カトリックの司祭の中で、この町を徘徊している醜惡な流言に対して批判的見解を説教壇上から述べる者は、唯一人としていなかった。<sup>20)</sup>

ブレングラスは、自分自身と地元マシーナのユダヤ人社会が発揮しうる問題解決能力の限界を悟っていた。そこで、極めて早い段階で、全国的ユダヤ人組織へ救援要請を行なった。

彼は既に幼女失踪事件発生当日の夜遅く、ニューヨーク市内に住む、あるユダヤ人の自宅へ、救援を求める電話をかけていた。救援を求められた人物の名はルイス・マーシャル、億万長者の博愛主義者であり、ユダヤ人の人権擁護者として、アメリカ国内でつとに声望が高かった。

マーシャルは全国的ユダヤ人組織のひとつアメリカ・ユダヤ委員会の会長であり、彼の背後には、政財界、法曹界で影響力を持つ著名ユダヤ人と、全米で四万人に及ぶ会員が控えていた。

電話口から伝わるブレングラスの切迫した訴えに対して、自宅の寝室でくつろいでいたマーシャルは、あらゆる法的・財政的支援を行なうことを約束した。更に、専門の調査員を現地へ至急、派遣する事も約束した。

マーシャルの命を受けた調査員、ボリス・スモラーは、その夜の内に始発列車へ飛び乗り、300マイルの行程を列車を乗り継ぎ、翌、9月23日の午後3時

19) S. J. Jacobs, "Reminiscence," pp. 472f.

20) S. J. Jacobs, "Smalltown," p. 25.

には、ブレンダスの自宅へ到着した。<sup>21)</sup>

この様に迅速な対応をマーシャルが採ることができた背景には、第一に、彼がアメリカ国外、とりわけ東欧のユダヤ人問題にも通暁しており、儀式殺人告発というもの、地域社会に暮らすユダヤ人住民に対して、如何に基大な物理的脅威を及ぼすものであるかという点を正確に理解していたからである。

また第二に、マーシャル自身が、マシーナと同じ、ニューヨーク州内陸部に所在する地方都市、シラキューズの出身であったため、類似した環境にあるマシーナという田舎町で、ユダヤ人社会の存立を支えている基盤が、如何にもろいものであるか、という事を察知できたからである。

マーシャルは、マシーナ・ユダヤ人社会に加えられた誹謗・中傷行為に対して謝罪を求めるその後の交渉において中心的役割を果たしていった。彼は州警察の対応に対しては、第一に、幼女の失踪を事実無根の流言と関連づけた点、第二に、ユダヤ教徒にとり重要な聖日、「贖罪の日」に、こともあろうに聖務を直前に控えたラビを警察署へ出頭させ、反ユダヤ的偏見に満ちた尋問を行なった点において、公職者の過失は極めて重大であると非難した。そして、現場の捜査責任者マッキャン巡査長および、彼の上司たる州警察幹部に対して謝罪と辞任を要求した。

一方、マシーナの町長に対しては、流言の蔓延を阻止するために自治体の長として、何ら手だてを講じなかった責任を追求し、ブレンダス個人と地元ユダヤ人社会に対する謝罪文の即時公刊を要求し、その要求を受け容れない場合は州裁判所へ提訴する構えをみせた。<sup>22)</sup>

町長ハウズとマッキャンは、謝罪声明を公にすることに対して、当初強い難色を示した。しかし、最終的にニューヨーク州知事、民主党のアルフレッド、E・スミスが調停に入り、この両者に対して謝罪声明を即時、公にするよう促がした。<sup>23)</sup>この時、スミス知事は、同年11月に行なわれる大統領選挙に民主党候補として出馬中であった。スミスにとり、ニューヨーク州のユダヤ人社会は、1924年の州知事選以来、最も強力な支持基盤のひとつであった。

大統領選挙を目前に控えたスミスは、ユダヤ人社会の意向に対しては最優先

21) S. S. Friedman, *op. cit.*, p. 122.

22) "Ritual Murder in America," *American Jewish World* Oct 5. 1928, p. 4; *American Jewish Year Book* Vol. 31 (Philadelphia, 1929), pp. 349-352.

23) S. J. Jacobs, "Smalltown," p. 25.

の配慮を払う必要があったのである。<sup>24)</sup>

その結果、9月25日に、町長、マッキャンそして州警察当局は、幼女失踪事件をユダヤ人の仕業と関連づけて捜査を行なった事、また「ユダヤ人による儀式殺人」という流言を助長したことの責任を認め、公式に謝罪を行なった。

一方、州警察当局は、ブレングラスを尋問したマッキャンを厳しく譴責し、無期限の停職処分をいいわたした。その理由は、職務遂行上の思慮分別の欠除、警官としてあるまじきふるまいの故とされた。停職処分が解除された後も、本事件での過失が尾をひき、マッキャンは退職する迄の、その後の20年間、一切、昇進することができなかった。<sup>25)</sup>

事件の処置をめぐる一連の経過の中で、次の点が明らかになったといえよう。それは同時代の東欧で発生した同種の事件の場合とことなり、民主主義の成熟したアメリカにおいては、ユダヤ人社会は、より迅速かつ有効な対抗手段を構えることができたという点である。

ところで、行方不明となっていた幼女は、その後どうなったのか、幸運な事に、9月23日、午後4時30分頃、彼女は町の中心部から約1マイル離れた藪の中から無傷の姿で発見された。失踪から実に24時間ぶりのことであった。仮に彼女が無事な姿で発見されていなかったとしたら、恐らく、レオ・フランク事件の時の様な反ユダヤ暴動が発生していたであろう事は、現地の雰囲気から容易に想像できた。既に、この日の午前10時には、町役場のまわりには約三百人の群衆が集まっていた。

幼女発見の直後には、今度は別の流言がマシーナの町を飛びかっていた。それは「ラビが警察に尋問された事で、おじけづいたユダヤ人達が犯罪の発覚を恐れるあまり、一旦、拉致したバーバラの身柄を解放した。」というものであった。この流言は、その後、しばらくやむことはなかった。<sup>26)</sup>

24) L. H. Fuchs, *Political Behavior of American Jew* (Westport, Conn, 1980), pp. 66f.

25) L. Dinnerstein, *Anti-Semitism in America* (N.Y., 1994), p. 101; S. S. Friedman, *op. cit.*, p. 169.

26) "Ritual Murder Libel Raised in American Community," *American Jewish World* Oct 5, 1928, p. 2; ed. by. C. H. Voss, *Stephen S. Wise: Servant of the People, Selected Letters* (Philadelphia, 1970), pp. 158f; Letter from Samuel L. Brenglass to Jacob R. Marcus, June 5, 1987, p. 2. Histories File, Anti-Semitism [1921-59], American Jewish Archives.

また地元キリスト教徒住民のユダヤ人に対する敵意も、その後、長らくおさまる事はなかった。当時、大学生であったブレングラスの息子による後日の述懐によれば、プロテスタント系住民達はユダヤ人商店に対するボイコット運動を組織し、それは一年間近くの長きにわたり継続したのである。<sup>27)</sup>

今回の事件が、アメリカのスモールタウンの典型とも言える町で発生した事を想起すれば、当時のアメリカ人の日常生活の表層のすぐ下には、強い反ユダヤ主義が渦巻いていたといえよう。<sup>28)</sup>

---

27) Ibid., p. 2.

28) H. L. Feingold, *Jewish People in America: A Time for Searching* (Baltimore, 1992), p. 5.